一、自由大学運動の歴史

山野晴雄

上田自由大学の生成

自由大学運動は、一九二〇年代のはじめから三〇年代のはじめにかけて、長野県・新潟県を中心に全国各地で展開された、地域民衆の自己教育運動として知られている。

この自由大学運動の出発点となった上田自由大学（創設当初は信濃自由大学）の創設は、長野県上田・小県地域で創造的に生きようとしていた金井正・山越脩蔵・猪坂直一という三人の青年たちと、新しい文化運動の実現に意欲を示していた在野の哲学者である土田杏村との人間的な交流の中からつくりだされたものである。

金井と山越は、養蚕地域の神川村の中でも資産家のみならず、上田周辺でも有力な富をもつ蚕種製造農家の青年で、きわめて似た境遇にある文化的志向の強い青年であった。この二人の青年が行なった最初の共同作業が村内の生産力調査（一九一五年）であったことは、二人の地域での活動がまず農民の生活向上におかれていたことを示している。

金井は、哲学に関心をもち、一九一六年には小県教育会の哲学講習会に費用の大部分を負担して西田幾多郎を招いている。さらに同じ年にフランス留学を終えて帰国した画家の山本鼎と会見し、そこで山本のロシアでの体験談に共鳴して、山越とともに自由画教育運動と農民美術運動に取り組んでいく。金井は、教育の問題に対して、「人は誰でもいいものを有って居る」「教育と云ふことはこのいいものを導き出す機会を与へること、銘々のもって居るいいものに気づかせることだ」という考え方を披瀝している（『芸術自由教育』一九二一年六月号）。人間を鋳型にはめるような教育に対して批判的な考えを持っていたがゆえに教育の改造に関わったのである。

山越の場合は、一九二〇年五月の総選挙の際、普通選挙を要求する檄文を村民に配布するとともに、普選推進のための講演を土田杏村に依頼する。この地域では、川辺村の小林泰一が中心となり、東大新人会とも連絡を取り、「小県立憲青年団」の結成が試みられ、青年たちの多くが応援した普選派の候補者が当選している。そして、ここに結集した青年たちによって、一九二〇年一〇月に「人類ノ自己実現」と「現代日本ノ正当ナル改造」を目標に掲げた信濃黎明会が結成される。黎明会にその名を借り、新人会にその綱領を借りた、この信濃黎明会には、山越や猪坂をはじめ小県郡聯合青年団の官製的な体質に飽きたらず、民本主義に共鳴していた上田周辺の富裕な農家の青年たちが集まり、永井柳太郎や尾崎行雄らを招いて普通選挙と軍備縮小の運動を展開していった（信濃黎明会については、拙稿「大正デモクラシー期における青年党類似団体の動向」『自由大学研究』第九号、一九八六年を参照のこと）。

左より山越脩蔵、金井正、西田幾多郎
（1916年8月、上田市内の上村旅館にて）

土田杏村の講演は、彼が病気であったため実現せず、一九二〇年九月に哲学講習会として実現する。土田は、このときのことを、こう書いている。「青年Y（山越—

土田杏村（1891～1934年）

引用者）から、吾々農民が哲学の講義を聞きたいから来てくれと言ったので、私は農民と哲学と余りにその対照が面白いので、その秋出張することにしました。そして哲学の初歩手ほどきのようなものを致しました」（『文化運動』一九二二年一〇月号）。

土田の講演は好評を博し、翌一九二一年二月には再び哲学講習会が開かれた。山越は、この講習会の成功から、さらに視野を広げて、哲学だけでなく広く人文・社会科学系の学問を系統的に学ぶ、民衆自身による学習機関をつくる必要性を土田に提起していく。土田は京都にあって、新しい学習運動の実現に意欲を示し、山越と手紙を往復しながら、その具体化を図っていった。土田は、哲学講習会を終えて京都に帰ったとき、「僕は何処までもアカデミックの学風を嫌ふので、あゝして一般の民衆に講演するのが何より愉快なのです。一般の民衆さへ哲学化して来たら、アカデミイの連中が却（かえっ）て覚醒させられて了（しま）ふだらう。（中略）文化運動の方も大いに信頼して居ます。新らしい人達のまどゐをつくって下さいガサガサした労働運動などにはうんざりして了ふのです」と、山越に書き送っている（山越脩蔵宛土田杏村書簡、一九二〇年四月一九日付）。この手紙にみられるように、土田は既存のアカデミズムはもちろん、既存の社会主義運動や労働運動にも飽きたらない気持ちをいだいていた。それゆえ、自由大学の実現に積極的に関わっていった

のであり、上田からの熱心な問いかけに応えて、みずから「信濃自由大学趣意書」を起草している。その趣意書は、一九二一年七月に一般に公開されたが、設立の趣旨を次のように書いている。「学問の中央集権的傾向を打破し、地方一般の民衆が其の産業に従事しつゝ、自由に大学教育を受くる機会を得んが為めに、綜合長期の講座を開き、主として文化的研究を為し、何人にも公開する事を目的と致します」。

この趣意書からも知られるように、自由大学運動は、日々の生産活動に従事する民衆の立場から近代日本の教育体系を批判し、新しい形態の民衆の学習機関を創造しようとするものであった。土田は、別のところで、自由大学を「民衆が労働しつゝ生涯学ぶ民衆大学」と述べているように、自由大学は、民衆の自己教育を基礎に、労働と結びついた生涯にわたる学習の機会として構想されたのである。

上田自由大学は、この地域の青年たちが高等教育を受ける機会に恵まれなかったなかで、青年たちが自らの手で学習の場を創造していった運動であることを意味している。青年たちの多くは比較的富裕な農家の長男で、地元の小県蚕業学校や上田蚕糸専門学校・上田中学校へ進学し、卒業後は家業を継ぎ、地域に定住する人たちが多かった。したがって、自由大学は、このような地域の青年たちの知的欲求の向上と自己成長のための学習運動として展開されていった（上田自由大学については、拙稿「大正デモクラシーと民衆の自己教育運動」『季刊現代史』第八号、一九七六年などを参照）。

創設期の上田自由大学

このようにして自由大学運動はまず、長野県の上田・小県地域に生まれた。上田自由大学の講義が開始されたのは、一九二一年一一月一日のことであったが、創設期の会場となったのは上田市横町の神職合議所で、がらんとした四〇畳ばかりの大広間の荒れ果てた畳の上に、近所の寺院から借り集めた黒板と古めかしい机を並べるという貧弱な設備のなかで講義が始まった。第一回の講義は同志社大学教授恒藤恭の「法律哲学」であるが、二二、三歳から六〇歳くらいまでの聴講生五〇名余りが集まっていた。その姿を見て、講師の恒藤は、〝一種悲壮な感〟にうたれたという。それは、「真理と自由とに向かって熱烈な欲求をもっている人々と、それを取り巻いている簡素な、うす汚い建物の内部との対照がその建物の中にはいった瞬間に、私の眼にはっきりと映じた為ではなかったらうか」。京都に帰ってから恒藤は、聴講者たちに宛てた手紙のなかで、そのように書いている（「信濃自由大学聴講者諸君！」『信濃自由大学の趣旨及内容』一九二三年）。

上田自由大学の第１回講義が行われた伊勢宮の神職合議所

さらに恒藤は、同じ手紙のなかで、「現在の社会には、外形が華麗であり、宏大であって、しかも内容が空疎であり、貧弱である計画や、事業やが、あり余るほどあって、われわれを失望させ、憤慨させる場合が尠くないのは、まことに残念なことと思いひます。それからみると、信濃自由大学が、たとへてみると、むかしの塾でも思ひおこさせるやうな形態をとって生まれ出て、謙遜に、質実に、みづからの存在と生長とをはじめたといふことは、それにたづさはる人々の誰れにとっても、かへりみて心たのしく、心づよい事柄ではないでせうか」と、講師としての感激を語っている。この一文からも知られるように、自由大学は昔の寺子屋、私塾的な雰囲気のなかで始められた。

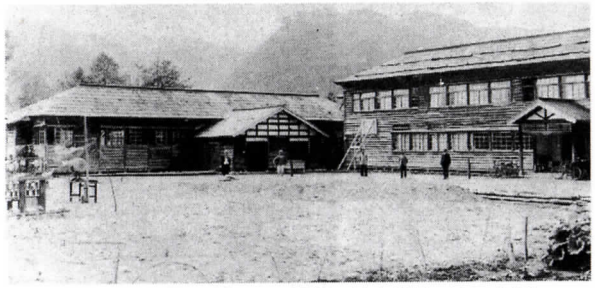
上田自由大学の講座の開講時期は、農村青年の時間的な余裕を考慮して、いわゆる農閑期、だいたい一〇月から翌年三月までとし、聴講料は聴講者が一講座三円程度を負担し、人文科学系の講座を中心に、一講座平均五日間、一日平均約三時間の講義を行なっている。講師には、この法律哲学の恒藤恭をはじめ、哲学概論の土田杏村、文学論のタカクラ・テル（高倉輝）、哲学史の出隆、社会学の新明正道、政治学の今中次麿など、学問の分野でも新しい気運を代表する人々が招かれた。その講義内容は、どの講師も普通の大学での講義と同様なものを講義していたと考えられており、現存する筆記ノートによればかなり高度であったことが知られる。今中次麿は「私の一番嬉しいのは私が学校に於けると同じい自由を与えられ同一程度の講義をしたにも係はらず御諒解下すった御様子を見出たことであります」と述べている（馬場直次郎ノート「上田自由大学講座筆記」）。また自由大学一週間の講義は大学一年間の講義に匹敵したといわれ、第二期に出講した山口正太郎は、「大阪商大の一年分の講義が五日目に終ってしまって、あわてて宿屋で翌日の講義の準備をし」たというエピソードも残っている（高倉テル「自由大学運動の経過とその意義」『教

育』第五巻第九号、一九三七年）。

聴講者は、一講座あたり四〇名で、比較的富裕な中農層の農村青年と小学校の教員が多かったが、なかには少数ながら芸妓や女教師など女性の参加も見られた。自由大学では、聴講者と講師とは学問への情熱によって結ばれ、たとえば、恒藤恭は「寒さにひきしまった空気の中に、静けさがみち渡り、あかるくたのしげに輝く電燈の下に、聴講の方々の熱のこもった瞳をみひらいて、じっと聴講して下さるのを眺めながら、私は時間のうつるのを気付かないでしゃべりました」と語り（前掲「信濃自由大学聴講者諸君！」）、出隆は「毎晩三時間あまりはみっちり講義をすることができたし、またその講義の前後にも、社務所に泊まりこみの熱心な青年もあって、いろいろ話し合ったが、みんな自分の気持ちをむきだしに話す真剣で実直な人々だった」と回想している（『出隆自伝』一九六三年）。自由大学の講師の中で最も人気のあったタカクラ・テルは、別所温泉に移住し、病気の土田のあとを継いで自由大学を指導していくことになる。

自由大学運動の拡大

上田で始まった自由大学の試みは、各地に反響をよび、長野県・新潟県その他の地方都市や農村に波及していった。各地の自由大学は主に土田杏村の人的交流のなかから生まれていった側面が強いが、具体的には、長野県内では下伊那郡飯田町に伊那自由大学（創設当初は信南自由大学）、松本市に松本自由大学、新潟県では北魚沼郡堀之内村に魚沼自由大学、南魚沼郡伊米ヶ崎村に八海自由大学、群馬県前橋市に群馬自由大学などが設立され、それぞれ地域民衆の学習運動としての足跡を残していった。また、宮城県・京都府・



八海自由大学の主舞台、伊米ヶ崎小学校（大正末期）

青森県・兵庫県などでも自由大学設立の動きが見られた。自由大学が各地に設立されるのにともない、一九二四年八月には各地の自由大学の連絡機関として自由大学協会が上田につくられ、一九二五年一月からは猪坂直一が発行兼編集者となって『自由大学雑誌』が刊行された。

このように自由大学運動は、全国各地に波及していく一九二四年に高揚期を迎えたが、しかしその頃から、当時の青年をめぐる社会的・文化的状況と無関係ではあり得なくなり、外在的にも内在的にもある種の亀裂に当面せざるを得なくなっていた。その一つは、土田杏村の構想する自由大学の理念が批判を受けるようになったことである。

長野県下伊那地方に設立された伊那自由大学は、この地域の社会主義青年運動の中核をなしていた下伊那自由青年連盟・LYLを脱退した横田憲治・平沢桂二と、青年団自主化運動を積極的に進めていた下伊那郡青年会の会長であった須山賢逸（けんいつ）の三人が、上田の猪坂直一やタカクラ・テルを訪ね、自由大学の趣旨や経験を聞いて設立したものであった。土田杏村は、『信南自由大学趣旨書』（一九二三年）のなかで、自由大学の教育について、「我々の大学の教育は、団体として特に資本主義的でも無ければ社会主義的でも

前列左より山田阿水、土田杏村、後列左より平沢桂二、須山賢逸（1922年8月）

は、社会主義青年運動の側から積極的な批判を受けるようになったのである。この点は、土田が、一九二四年三月のＬＹＬ検挙事件ののち伊那自由大学が出したパンフレット『自由大学とは何か』（一九二四年）のなかで、「自由大学は教育のための一機関であり、其れ以外に何等の目的をも持つものでは無いから、自由大学として或る特定の社会運動に加担せず、随って他のいかなる社会運動団体とも秘密の提携をなす如きことは過去に於て絶異であったし、且つ将来に於てもあり得ない」と述べて、自由大学が非合法の社会主義青年組織ＬＹＬの合法的学習機関とみられる誤解を解こうとしたことに対して、社会主義青年運動の側からは「主旨がプロカルトであると主張した限り、吾等の精神は資本主義的でも無く社会主義的でも無いとは何と云う心底か測られぬ。検挙事件当時に急しくパンフレットを出して、白々しい寝返りを打った様な行為はたとえ他人でも青無い。其れ等の批判を、自分自身で決定し得る精神能力と教養とを得ることが、我々の教育の眼目である」と述べたが、これに対して、自由青年連盟の幹部であった北原亀二は「ブルとプロの世の中で自分が其の中間にいてどちらにも喜ばれたい」とする態度である、と批判している（『信濃時事』一九二三年一一月二五日付）。自由大学運動における土田杏村の文化主義の立場

年同志なら浅まし過ぎる」と、痛烈な批判が加えられたことにもみられる（『政治と青年』第一五号、一九二五年二月一〇日付）。

しかし、このような外部からの批判だけでなく、自由大学運動の担い手の中からも土田杏村の立場とは異なる主張がなされるようになる。伊那自由大学の須山賢逸は、山本宣治に宛てた手紙のなかで、上田や他の自由大学と自分たちの自由大学とは「其のモットーに於て大いに違っている」とし、自分たちの自由大学は「現代の教育が凡て一部階級の自家擁護の具となりつつあり、それがために学問の独立すらも無視されつつある事に反対して立ったプロレットカルト的内容を持つ点」が違うと述べている（山本宣治宛須山賢逸書簡、一九二三年一一月二四日付）。土田の場合、自由大学運動は教育運動であり、教育と宣伝は区別しなければならないとし、社会運動とは一切関わりをもたないで学習を進めていくべきだと考えをもっていたが、伊那自由大学の場合は、プロレットカルトの立場を明確にし、下伊那郡青年会や自由青年連盟と密接な関係をたもちながら、当時無産運動と関わりをもっていた人々を多く講師に招き、講座内容も、上田とは違って、社会科学系の講座を多く組織していった。また、社会主義青年運動の側でも、基本的に自由大学を支持する態度をとったことが知られ、ＬＹＬ検挙事件で自由青年連盟が結社禁止になったあと結成された政治研究会下伊那支部の機関誌『政治と青年』第四号（一九二四年一〇月一〇日付）は、「吾々が常に求め来ったものは教育の機会均霑であり、学理の探求であったから」、自由大学の存在は「誰しもが歓んで迎えねばならぬことであった」とし、ＬＹＬ検挙事件以来、「下伊那の青年

会の空気に大きな動揺を生じている時、自由大学の跳躍は望ましいことである」と述べ、また第九号（一九二四年一二月一日付）も、自由大学の現状を批判し、その「徹底的改造」を求めつつも、「大学を愛し大学を吾等のものとして成育させたいと希望する人々は来って大学の危機を救うべきである」と述べている。このように伊那自由大学では、土田の構想とは異なったかたちで運動が展開されていったのである（伊那自由大学については、拙稿「伊那自由大学の歴史」『月刊社会教育』一九七五年九月号などを参照）。

晩年の渡辺泰亮

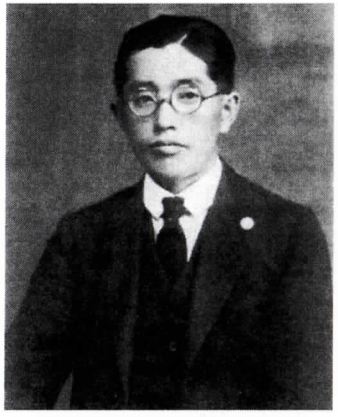
また、新潟県の魚沼自由大学は、土田杏村と新潟師範時代以来の友人であった小学校長の渡辺泰亮（たいりょう）が、堀之内村の響倶楽部という商工業に従事していた青年たちのグループや小学校教員と協力して設立したものであるが、ここでは、堀之内村当局から毎年一〇〇円の補助金を受けていた。村当局がどのような意図で補助金を出したのかは不明であるが、補助金の支出を理由に村当局が講師その他に対して干渉を加えた事実は確認されていない。しかし、この事実は、自由大学の費用は聴講者の聴講料でまかない、他から金銭的援助を受けないことを原則としていた自由大学の立場からの逸脱を示している。

自由大学運動の広がりの背後には、このような矛盾が幾重にもみられるようになっていた。

新潟の自由大学運動

新潟県の自由大学運動は、堀之内村の響倶楽部の青年たちが上越鉄道堀之内駅の開通記念事業を計画し、小学校長の渡辺泰亮に相談し、一九二二年八月、魚沼夏季大学の名前で土田杏村を招いて講演会を開催したことに始まる。翌一九二三年になると土田は、魚沼夏季大学を「魚沼自由大学」の名称にするよう提案し、「この方がこれから新しい気分を象徴する」と、渡辺に書き送っている（渡辺泰亮宛土田杏村書簡、一九二三年六月二六日付）。

一九二三年八月の講座は、タカクラ・テルの「近代思潮論」、山本宣治の「性教育論」のほか、科外講演として沖野岩三郎の講演と中山晋平（しんぺい）の音楽指導が行なわれ、また、婦人のための講演も行なわれた。しかし、この講座のあと、県当局からは、渡辺が公職の身にありながら自由大学運動に関わったことから何らかの注意があり、とくに山本宣治と沖野岩三郎を講師に招いたことが問題とされ、一九二三年一〇月に次のような「注意書」が県内の郡市長・町村長・青年会長および学校長に通知されている。


代議士時代の山本宣治（『山本宣治［下］』〈不二出版刊〉より）

「近時一般民衆の知識旺盛に趣き結果各地に於て講習会講演会夏期大学等を開催するもの逐年（ちくねん）増加するは一般文化の進展上慶賀に堪（た）へざる所なりと雖（いえど）も往々にして講師の人選に周到なる注意を欠き講師其人の思想の傾向発表方法等頗る寒心に堪へざるものあり（中略）

山本宣治の講義風景

爾今講師の人選に関しては主催者に於て一層周到厳密なる調査を遂げかかる人物を講師として招聘する事無之様十分御注意相成様致度此段及移牒候也」

これに対して土田は、ただちに『報知新聞』紙上で反論し、「県当局が毎年大規模の夏期大学を開催して居たけれども、其講師は御用学者許りであって青年の要求を充たすに足りない、我々は昨年以来自由大学を創設して新らしい空気の思想運動を起した」と述べ、このような「各県に於て現に行はれつつある思想干渉」は、「一見しては法律のどの文句にも牴触して居る様に見えないものだから平然として為さ」れているが、「それは思想の自由を拘束した、許す可からざる憲法違反でさへある」と主張した（「震災に際しての思想戦」『報知新聞』一九二三年一一月七日付）。

このような県当局の圧迫にもかかわらず、一九二三年一二月には渡辺の地元である伊米ヶ崎村に八海自由大学が創設された。しかし、堀之内村と伊米ヶ崎村という隣接する狭い地域にそれぞれ自由大学ができたことに対しては、土田も経営難を心配し、「魚沼と八海と二箇所でやるのはどうしても不利の様に思うがどうか」「冬は八海の方でやれば夏は魚沼の方でやるとか、そこに何とか妥協の方法はないか」と提言し（渡辺泰亮宛土田杏村書簡、一九二四年三月一〇日付）、タカクラも自由

大学を一つにして「魚沼自由大学」とし、越後川口に会場地を決めて「堅実にやった方がよい」と提言している。だが提言とは逆に、一九二六年には越後川口町に川口自由大学が設立されている。

その後、一九二四年七月には、土田杏村が「自由大学へ」という一文を草し、「我々の自由大学の季節が来た、友よ鍬を捨て鎌を収めて、新しい講義を聞く人とならうではないか。どんな新しい呼び声が我々の耳に響いて来るか。其れを思ふのは今から大なる楽しみだ。我々は人間になるのだ。人間らしい人間になるのだ」という文章に始まる、散文調のリズミカルな文章の中に人間教育を目指す自由大学の理念を平易に説き、自由大学への参加を広くよびかけた（『新潟時事新聞』一九二四年七月一一日付）。しかし、八月の講座を終えた直後から魚沼自由大学では、将来の自由大学のあり方をめぐって、響倶楽部の青年たちと小学校教員との間で内紛が生じ、響倶楽部の主流は自由大学から手を引き、林広策ら残った小学校教員が中心となって運営にあたることになった。内紛の要因には、講師の人選にあたって、聴講者が多く集まる講師を招くのか、聴講者が少なくても落ち着いて学習していける講師を招くのか、という路線の対立があったといわれる。

新潟の自由大学運動は、長野県の上田や伊那の自由大学とは異なる特色をもっていた。その一つは聴講者で、農村青年は少なく、小学校教員が多かったこと。このため第二に、開講の時期が、小学校教員の参加しやすい夏休みの時期にも開講されたこと、そして第三に、野口雨情・中山晋平・佐藤千夜子が講師に招かれ、学校での童謡教育・音楽教育に関わる講義・講習会が行なわれたことがあげられる。このような特色をもつ新潟の自由大学運動も、魚沼・八海両自由大学の支

柱であった渡辺泰亮が一九二六年三月に県視学として転出し、林広策ら自由大学の運営者が次々と他の地域に転出していったこともあり、一九二七年には幕を閉じたのである（新潟県の自由大学運動については、拙稿「新潟県における自由大学運動」『自由大学研究』第三号［一九七五年］、第四号［一九七六年］などを参照）。

自由大学運動の新しい動き

上田自由大学でも、一九二五年頃からさまざまの運営上の困難に直面するようになった。とくに聴講者の減少にともなう財政上の困難は、自由大学の経営に大きな影響を与えた。平均四〇名にすぎない聴講者の聴講料のなかから講師謝礼（一講座八〇円ないし一〇〇円）その他の経費を除くと経営は決して容易ではなかった。この地域の養蚕業の停滞と不安定の傾向の継続にともなって、自由大学の聴講料は民衆にとって負担となり、聴講者は減少し始めたのである。青木猪一郎は、「月月参円と云ふ大枚の聴講料が仲々大袈裟だ」「自由大学で高倉さんの『ドストエフスキイの研究』がある筈だが金が無いので中止。悲しい事だ」と、日記に書いている（「青木猪一郎日記」一九二三年一一月一〇日条・一二月一日条）。また、自由大学の講義内容が人文科学系の学問に偏っていることへの批判に加え、自由大学に熱心であった講師の海外留学による講師難、タカクラ・テルと猪坂直一との間の亀裂など問題が重なり、一九二六年四月以降、ついに講座の中断を余儀なくされた。

それから二年後、農村不況が深刻化するなかで、この地域でも農民運動が活発化し、一九二八年四月には小県農民組合連合会が結成された。このような状況のもとで、青年たちは状況打破に

動き始め、小県郡連合青年団はしだいに急進化し、青年団自主化運動や青年訓練所反対運動、電灯料値下げ運動などさまざまな社会的実践を進めていった。この青年団の幹部の人たちによって自由大学が再建される。一九二八年二月に出された自由大学の再建をよびかける手紙には「地方文化開拓の為には唯一の機関たるこの大学の閉鎖は地方民衆の此上もない不幸損失であるといふのでその復活を希望する人達が少なくありません」と、述べられたが、その運営の中心に立ったのは、猪坂直一・山越脩蔵にかわって、青年団の幹部、山浦国久・堀米義雄らの青年たちであり、それに全面的に協力したのがタカクラ・テルであった。

新しい動きは伊那自由大学でもみられるようになった。伊那自由大学では、それまで飯田で講座を開いていたが、一九二七年に、新たに支部をつくり、この支部段階で講座を組織していく形態に変わった。まず一九二七年一〇月に千代村支部ができ、さらに竜峡支部・下条支部と三つの支部がつくられた。その中で特に注目される動きを示したのが千代村支部であった。

千代村支部は、千代青年会執行部の青年たちによって組織されたが、この青年会は下伊那郡青年会の中でも最もラジカルな村青の一つであったといわれ、文化活動の面では、青年団自主化後の一九二四年に文庫を村費運営の図書館としてその自主運営に成功するとともに、一九二五年からは自由大学を支持して補助金を出して会員を受講させていた。一九二七年九月に発表された設立「趣旨書」は、土田杏村ではなく、青年会の島岡巳勝が起草したものであるが、そこでは自由大学の学習を地域の変革と結びつけてゆく構想を打ち出しているのが注目される。

「趣旨書」は、まず、「物質的な意味」でその日暮しをくりかえしているだけで「精神的な意味の生活」をまったくもっていず、「人間的な色を全く塗りつぶして牛馬同様な暗澹たる生活」を送っている、という農村青年のおかれた現実認識から出発して、「健全なる百姓として快活に働きうる理想社会を作りあげ」るためには「教育の仕事」が重要である、と教育による理想社会の建設をうたっている。さらに、小学校教育・補習教育について、「吾々が社会構成して行く為の人格識見をどれだけ作ったか、経済的関係の批判力をいつ与えたか、吾々は科学の時代に生きていると云うが吾々はどれだけの科学を掴んでいるか」と、その「概念的なパンフレット」の教育を批判し、新社会建設のための本格的な科学的理論の習得の必要性と理論の主体化を強調して、その「吾々の希求を代表する一つの教育運動」が自由大学運動であると主張する。そして「趣旨書」は、たんに講座の開講だけでなく、「補習学校、図書館等の理想的改革」にも努力して地域文化の向上を図り、また研究会を組織して「千代村の経済統計など」をつくり、「現実的な生産関係に裨益する事」を主張している。この千代村支部の文書は、自由大学運動を地域変革のための学習運動として構想しており、そこには土田杏村の構想した自由大学の理念に対する批判的な継承がみられる。

千代村支部では青年会と組織的に提携して講座を組んでいったが、その講義内容は、三木清の「経済学の哲学的基礎」では唯物弁証法・資本論を中心とする講義が行なわれ、またタカクラ・テルの「日本民族史研究」では「従来の歴史は真の歴史ではなかった。一部の階級の歴史であった。即ち政権を握った人々の歴史であった」「吾々は自らの真の歴史をさがさねばならない」という言

葉で始まり、「文明文化が進むに従って有力なる階級が生まれて農民を支配するに至った」とし、権力が寺院から貴族、武士、商人、資本家へと推移したことが話され、講義の後半では、農村不況下の地域の現実を上小農連の調査資料をもとに具体的数字をあげて説明を加えたあと、農民が「歴史には始めから表れなかったのは財力を有しない被支配階級であり、苦しい階級であったからである。然らば此の階級は如何にして人間的解放の道を探すか。それは農民同盟に他なし」という言葉で結ぶ講義が行なわれている（楯操ノート「日本民族史続稿」）。このように千代村支部では、農村青年のおかれた生活と現実をふまえながら講義を組織していく状況が生まれつつあった。

上田自由大学でも、一九二八年に再建されると、同様の傾向が見られるようになった。自由大学には、上小農連の井沢譲や井沢国人らタカクラとともに農民組合運動に関わった貧農層の青年たちも多く聴講するようになった。大正期には中農層の青年たちが中心であり、聴講者の階層にも変化がみられるようになる。そういうなかで青年たちは、自由大学に自らの社会的実践の「思想的な根拠を求め」たといわれ、「自由大学に、知識より分析を多く要求するようにな」ったといわれる（タカクラ・テルより聴取）。すでに土田杏村は健康上の事情もからんで自由大学の運営に直接関わることはなかったが、上田自由大学でも土田の自由大学理念を批判的に継承する動きがみられるようになったのである。

しかし、この上田自由大学も、その大きな柱であったタカクラが、一九二九年三月の山本宣治の死を契機にマルクス主義者への傾斜を強め、活動の重点を農民運動に移し、「北信左翼論壇の暁将」

として官憲当局の厳しい監視を受けるようになった（「二・四事件ニ関スル概況」長野県庁文書『昭和八年知事事務引継書』）。しかも一九三〇年の大恐慌によって、上田・小県地域の養蚕農家は壊滅的な打撃を受け、聴講者である農村青年層の経済的基盤が崩され、実際に二円ないし三円の聴講料を払って自由大学の講義を聴きにいく青年もほとんどいなくなった。伊那自由大学の場合にも同様の理由で講座の開講が困難となった。そして一九三〇年一月、上田自由大学での安田徳太郎の「精神分析学」の講義が最後の講義となり、一九三一年には自由大学運動は自然消滅したのである。

自由大学運動の歴史的意義

この自由大学運動の歴史をふり返ってみると、大きく三つの時期に区分できる。第一期は、一九二一年八月に上田自由大学が創設されてから一九二三年八月に魚沼自由大学が本格的に講座を開講するまでの時期で、自由大学運動の草創期にあたり、土田杏村を理論的指導者とし、土田の大きな影響力のもとに学習活動を進めていった時期である。第二期は、一九二三年八月に魚沼自由大学が本格的に活動を始め、その後八海自由大学、伊那自由大学と各地に自由大学が設立され、一九二四年八月の自由大学協会の結成を経て、新潟での自由大学運動がほぼ終わる一九二七年一〇月までの時期で、自由大学運動の高揚期とみることができる。第三期は、一九二七年一〇月に伊那自由大学千代村支部ができ、翌一九二八年三月に上田自由大学が再建される頃から一九三一年に上田自由大学が自然消滅するまでの時期で、自由大学運動の衰退期とみることができる。ただ衰退期とはいえ、この時期には、タカクラ・テルを中心として社会運動と結びつきながら学習活動を進め、土田杏村の自由大学理念を批判的に継

承する新しい動きがみられた時期でもあった。自由大学運動の約一〇年にわたる生成と発展、衰退の歴史は、ほぼそのようにとらえることができる。

長野県上田に始まる自由大学運動は各地に大きな反響をよんでいったが、この自由大学運動の歴史的意義をどのようにとらえるべきか。

まず第一に、自由大学運動は近代日本の教育体系への根底的な批判にもとづく新しい形態の民衆自己教育機関を創造しようとした運動であったことである。土田杏村は、『自由大学とは何か』（一九二四年）のなかで、「現在の教育制度に対照せられての自由大学」の特色を指摘し、小学校から大学までの二〇年間が教育の場であり、「高い程度の教育」が有産階級に独占されている現行の教育制度は、「我々の要求に適合し得るものとは考へることが出来ない、それは当然改造せられて、我々の自由大学の理念を追求しなければならぬ」と述べ、自由大学を「民衆が労働しつゝ生涯学ぶ民衆大学」と規定している。これは、近代日本の教育体系そのものを批判し、学校教育は教育の本幹ではなく、成人教育こそが本幹にならなければならないという一つの構想を示している。

第二に、当時の文化状況のなかで考えた場合、自由大学運動は、それまで民衆とは絶縁した存在と思われていた学問・文化を、知識人の占有物からときはなち、民衆の側に取り戻そうとする運動でもあったということができる。当時論壇では、民衆文化論が大山郁夫や権田保之助などによって提唱されていたが、土田の「プロレットカルト論」もその一つをになう論議であったといえる。土田は、「自由大学へ」（『自由大学雑誌』創刊号）と題する一文のなかで、「日本の自由大学は何処の国の

教育機関の模倣でも無い」「自由大学は全く僕達会員の要求の中から出たものだ」と述べ、その独自性を強調したが、また「我々は本当に学問を民衆のものとしたいのだ。学問を空気の如く、水の如く我々の周囲に豊かにしたいのだ。今は学問の飢饉時代だ。学校は僕達に無縁の蜃気楼だ。随って学問自身も亦、其の蜃気楼の中で痩せ細り、一本立ちの出来ないものになって居る。僕達は学校を救はう。学問を救はう。野蛮なる民衆の手、其れが何時も死にかけたものに生命を吹き込むのだ」と述べているが、ここには学問を、教育を民衆の手に取り戻そうとする主張をみることができる。

最後に指摘しておきたいことは、大正期の自由大学運動は民衆の知的欲求の向上と自己成長のための学習運動という側面が強かったのに対し、昭和期にはいると地域変革のための学習運動の側面を強めていくというように、自由大学運動の性格に変化がみられたことである。しかし、その後の発展をみる前に、急激にファシズムへ傾斜する社会情勢と農村青年の生活を支えていた養蚕業の不況の深刻化などの要因にわざわいされて消滅していくことになるが、この自由大学運動の歴史は、大正デモクラシー期の地域民衆の文化創造がどのようなものであったかの一事例を示している。

上田自由大学

学期	開講年月日	日数	講師	講座	聴講者数	会場
1	1921.11. 1	7日間	恒藤　恭	法律哲学	56名	上田市横町神職合議所
	1921.12. 1	6日間	タカクラ・テル	文学論	68名	上田市横町神職合議所
	1922. 1.22	7日間	出　隆	哲学史	38名	上田市横町神職合議所
	1922. 2.14	4日間	土田　杏村	哲学概論	58名	上田市横町神職合議所
	1922. 3.26	2日間	世良　寿男	倫理学	35名	上田市横町神職合議所
	1922. 4. 2	5日間	大脇　義一	心理学	31名	上田市横町神職合議所
2	1922.10.14	5日間	土田　杏村	哲学概論	44名	上田市横町神職合議所
	1922.11. 1	5日間	恒藤　恭	法律哲学	47名	県蚕業取締所上田支所
	1922.12. 5	5日間	タカクラ・テル	文学論	63名	県蚕業取締所上田支所
	1923. 2. 5	5日間	出　隆	哲学史	50名	県蚕業取締所上田支所
	1923. 3. 9	5日間	山口正太郎	経済学	34名	県蚕業取締所上田支所
	1923. 4.11	5日間	佐野　勝也	宗教学	34名	県蚕業取締所上田支所
3	1923.11. 5	6日間	中田　邦造	哲学概論		県蚕業取締所上田支所
	1923.11.12	5日間	山口正太郎	経済思想史		県蚕業取締所上田支所
	1923.12. 1	5日間	タカクラ・テル	文学論		県蚕業取締所上田支所
	1924. 3.22	5日間	出　隆	哲学史		県蚕業取締所上田支所
	1924. 3.27	5日間	世良　寿男	倫理学		
	1924. 4. 1	5日間	佐野　勝也	宗教哲学		
4	1924.10.13	5日間	新明　正道	社会学(概論)		上田市役所
	1924.11. 3	5日間	今中　次麿	政治学(国家論)		上田市役所
	1924.11.21	5日間	金子　大栄	仏教概論		上田市役所
	1924.12.10	5日間	タカクラ・テル	文学論		上田市役所
	1925. 3.21	5日間	波多野　鼎	社会思想史		上田市役所
	1925. 3.26	5日間	佐竹　哲雄	哲学概論		上田市役所
5	1925.11. 1	5日間	新明　正道	社会学	21名	
	1925.12. 1	5日間	タカクラ・テル	文学論(フランス文学)	30名	上田市役所
	1925. 1.		谷川　徹三	哲学史		
	1926. 2.		中田　邦造	哲学(西田哲学)		
	1926. 3.		金子　大栄	仏教概論		
	1926. 3.22	5日間	松沢　兼人	社会政策		上田市役所
再建1	1928. 3.14	3日間	タカクラ・テル	日本文学研究	60名	上田図書館
	1928.11.19	3日間	三木　清	経済学に於ける哲学的基礎	25名	上田市海野町公会堂
再建2	1929.12. 6	4日間	タカクラ・テル	日本文学研究	28名	上田市海野町公会堂
	1930. 1.24	3日間	安田徳太郎	精神分析学	44名	上田市海野町公会堂

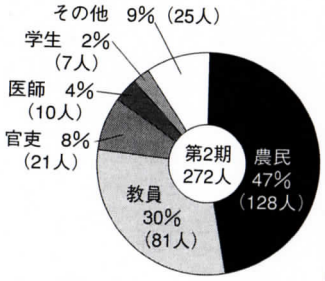
魚沼自由大学

開講年月日	日数	講師	講座	聴講者数	会場
魚沼夏季大学					
1922. 8.25	3日間	土田　杏村	教育の基礎としての哲学	約300名	堀之内小学校
1923. 8. 6	3日間	タカクラ・テル	近代思潮論	約150名	堀之内小学校
		タカクラ・テル	(婦人のための講演) 恋愛と家庭		
	1日間	沖野岩三郎	(科外講演)宿命された る個人は如何にして自 由を得べきか		
	3日間	山本　宣治	性教育論		
	1日間	中山　晋平	(科外講演) 音楽実施指導		
	1日間	山本　宣治	(婦人のための講演) 性の問題		
1924. 8.18	3日間	タカクラ・テル 由良　哲次	文学論（ダンテ） 現代の哲学、特にナト ルプについて	約100名	堀之内小学校
1925. 3.17	3日間	富田　碎花	アイルランド文学		
1925.12.12	5日間	住谷　悦治	社会思想史	約40名	堀之内小学校
1927. 6.25	2日間	今中　次麿	政治学	約50名	堀之内小学校

八海自由大学

開講年月日	日数	講師	講座	聴講者数	会場
1923.12.16	1日間	タカクラ・テル	(発会式講演) 文学概論		伊米ヶ崎小学校
1924. 2.16	2日間	出　　隆	哲学史		伊米ヶ崎小学校
1924. 8. 1	2日間	山口正太郎	経済学	約150名	浦佐村普光寺
1924. 8. 3	1日間	野口　雨情	童心芸術、童謡教育	約200名	
1925. 3.14	3日間	富田　碎花	アイルランド文学		佐藤清之丞宅
1925. 8. 1	1日間	中山　晋平 佐藤千夜子	(音楽講習会)	約150名	六日町小学校
1926.12.26	3日間	柳田謙十郎	リッカート　認識 の対象概論		伊米ヶ崎小学校

上田自由大学第2期（1922年10月～1923年4月）聴講者職業別数



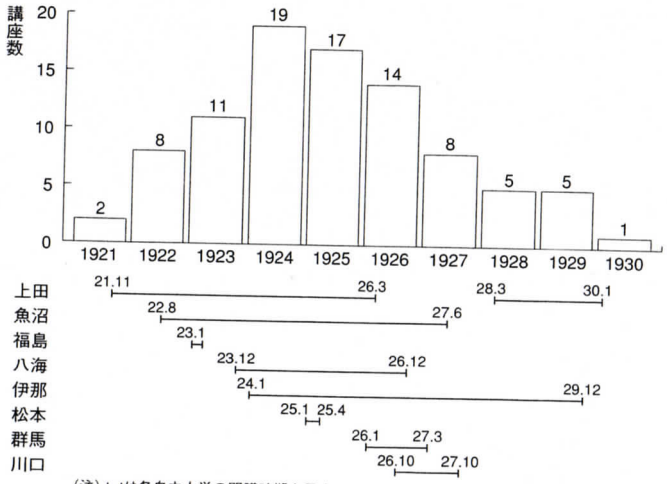
聴講生＼講義	哲学概論	法律哲学	文学論	哲学史	経済学	宗教学	聴講者延総計
農　民	17	23	26	24	22	16	128
教　員	14	12	23	17	6	9	81
官　吏	5	5	7	2	1	1	21
医　師	1	2	2	1	2	2	10
学　生	0	0	2	2	0	3	7
その他	7	5	3	4	3	3	25
合　計	44	47	63	50	34	34	272

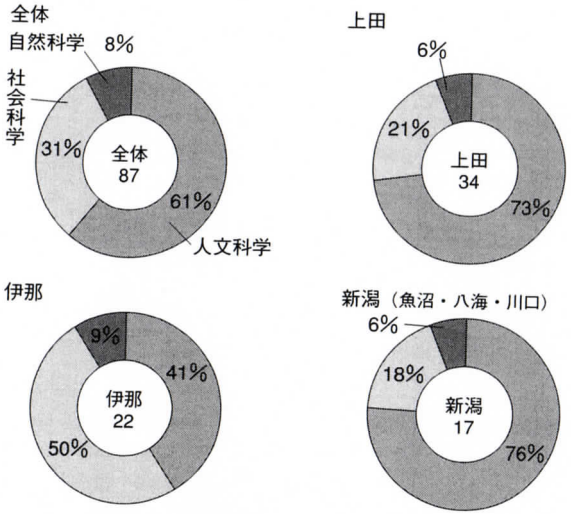
（注）『信濃自由大学の趣旨及内容』（1923年）による。

伊那自由大学

開講年月日	日数	講師	講座	聴講者数	会場
1924. 1. 8	5日間	山本　宣治	人生生物学	73名	飯田町飯田小学校
1924. 1.28	5日間	タカクラ・テル	文学論	52名	飯田町正永寺
1924. 3. 4	5日間	水谷長三郎	唯物史観研究	27名	飯田町天龍倶楽部
1924. 3.10	5日間	新明　正道	社会学概論	32名	飯田町天龍倶楽部
1924.10.21	5日間	山本正太郎	経済学	16名	飯田町天龍倶楽部
1924.12. 1	5日間	谷川　徹三	哲学史	23名	飯田町天龍倶楽部
1925. 1. 8	5日間	タカクラ・テル	文学論（ダンテ研究）	26名	飯田町天龍倶楽部
1925. 3.15	5日間	波多野　鼎	社会思想史	24名	飯田町天龍倶楽部
1925.11. 7	5日間	新明　正道	社会学(社会の観念について)	22名	飯田町飯田小学校
1925.12. 5	5日間	谷川　徹三	哲学史	24名	飯田町飯田小学校
1926. 2. 3	4日間	タカクラ・テル	ダンテ研究（続講）	15名	飯田町飯田小学校
1926. 2.25	4日間	西村　真次	人類学	16名	飯田町飯田小学校
1926. 3.11	5日間	佐竹　哲雄	哲学概論	17名	飯田町飯田小学校
1926.11.20	2日間	高橋　亀吉	日本資本主義経済の研究	26名	飯田町天龍倶楽部
1927. 1.12	3日間	谷川　徹三	哲学史	10名	飯田町飯田小学校
1927. 3.25	3日間	新明　正道	近世日本社会史	12名	飯田町飯田小学校
1927.11.15	5日間	今川　　尚	経済学原論		千代村米川公会堂
1928.11. 1	2日間	佐竹　哲雄	哲学概論		飯田町飯田小学校
1928.12. 1	4日間	タカクラ・テル	日本民族史		
1929. 2.15	3日間	三木　　清	経済学の哲学的基礎		龍江村大願寺
1929.12.12	3日間	藤田　喜作	農村社会について		
1929.12.20	3日間	タカクラ・テル	日本民族史研究		

年次別講座開講数



（注）⊢は各自由大学の開講時期を示す

講座内容